

山口・萩城跡（外堀地区）

1 所在地 山口県萩市北片河町

2 調査期間 一九九八年度調査 一九九八年（平10）五月～一九九九年三月

3 発掘機関 (財)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 谷口哲一・鈴木 卓・井川隆司・藤川貴和・村崎賢一・福本和久・吉武裕文

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(萩)

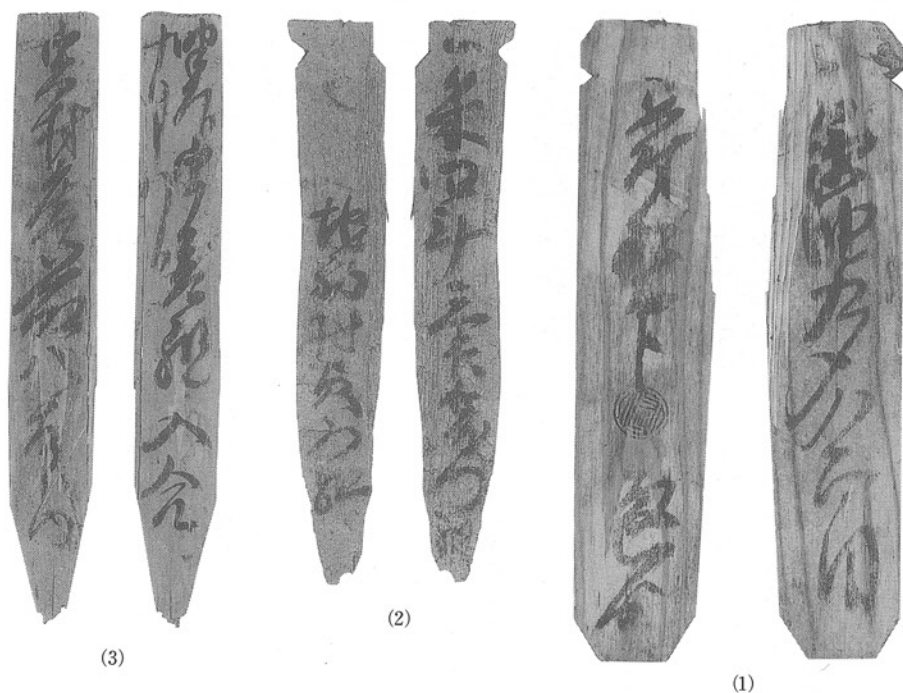
萩城跡（外堀地区）の発掘調査は、都市計画街路整備事業に伴う事前の調査として一九九七年度から実施され、一九九八年度が二年次にあたる。調査面積は約一九〇〇㎡。調査では外堀内に形成された町屋と、外堀の一部を検出した。町屋

は遅くとも一七世紀後半には外堀内に形成されていたことが判明し、一八～一九世紀にかけての二ないし三面の遺構面を確認した。検出された町屋遺構は、石垣・石列・石段・排水溝・礎石建物・埋甕・井戸・廃棄土坑・胞衣埋納遺構などである。

木簡は一八世紀前半～中頃の大規模廃棄土坑であるSK二九三から二〇点、SK二七七から一二点が出土した。そのほかに木簡状木製品四六点が確認されている。両土坑からは多数の近世陶磁器とともに、約千点の木製品（建築部材・下駄・漆碗・櫛・箸・曲物・栓・シュロほうき・へら・舟形木製品・人形頭部など）が出土している。なお木簡に使用された樹種はヒノキ科・スギ科が多い。ここでは、SK二九三出土木簡のうち三点を紹介する。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「く鯨油九〇八百目」
「」
・「く符於印（焼印） 通々」
104×34×4 032
- (2) ・「く一米四斗三升喜右工門組」
・「く 地福村貞右工門組」
145×23×5 033
- (3) ・「畔頭宇兵太組入合
十月八日」
・「宇田村庄や藤八郎内」
157×20×2 051



(1)は左側面上部を折損する。下端は台形にカットし、表・裏面と側面は丁寧な削り調整を施す。裏面中央には焼印を押す。(2)は上端の一部を欠損。樹種はスギである。(3)はほぼ完存。全体に削り調整を施し、樹種はヒノキである。

これらの木簡は、人名、地名、商品名や数量が記載されていることから、荷札として使用されたと考えられる。(1)の「通」は現在の長門市通であり、江戸時代日本海における捕鯨基地として繁栄したところである。「鯨油」は灯明の燃料などとして搬入されたものであろう。(2)の「地福村」は阿東町地福。(3)の「畔頭」は防長地域内における組頭のこと、庄屋のもと地域の行政を担当した。「宇田」は阿武町宇田。これらの荷札に記載されている地名から、防長各地より萩城下町にさまざまな物資が搬入されたことが窺える。

9 関係文献

(財)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター「萩城跡(外堀地区)」(「陶墳」二二一九九九年)

(谷口哲一)